

## スワヒリ語カエ方言の「関係節」

—準体言としての記述—

古本 真

京都大学大学院 / 日本学術振興会<sup>1</sup>

キーワード：スワヒリ語、関係節、準体言

### 0 はじめに

柴谷<sup>2</sup>は体言化 (nominalization) には、レキシコンに登録される名詞を作り出す語彙的体言化 (lexical nominalization) と、一時的に名詞に準ずる機能を担う準体言を生み出す文法的体言化 (grammatical nominalization) があると述べている (Shibatani 2009: 187, 柴谷 2014: 5)。

(1) 日本語の体言化の例 (柴谷 2014: 5 より一部抜粋)

語彙的体言化： 遊び、相撲取り、召し使い

文法的体言化： [太郎と花子が結婚している] のは誰もが知っている。(事態準体言)

[花子が  $\emptyset$  作ってくれた] のをみんなで食べた。(項準体言)

([] 内が準体言。 $\emptyset$  は空所を表す。)

そして、類型論的立場から、「関係節」と呼ばれるものの実体は、準体言であり、その準体言が名詞同様に主名詞を修飾していると説いている。この主名詞は、一般に関係節の「先行詞」と呼ばれるものにあたる。

スワヒリ語カエ方言<sup>3</sup>には、(2) - (4) に挙げるような「関係節」として記述される<sup>4</sup>四つの形式が存在する。形式的特徴の詳細については 3 節に譲るが、ここで簡単に違いを述べると、動詞が接頭辞 *m* でマークされるもの ((2a) (3a))、動詞が接頭辞 *o*<sup>5</sup> でマークされるもの ((2b) (4a))、*m* でマークされたコピュラ動詞に定形節が後続するもの ((2c) (3b))、接頭辞 *o* でマー

<sup>1</sup> 本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費 (DC1) (課題番号: 25・3150) の研究成果の一部である。この研究のためにデータを提供してくれた Sigombe Haji Choko 氏、草稿の段階から有益な助言を与えてくれた大西正幸氏、宮川創氏には、ここに記して謝意を表します。

<sup>2</sup> 柴谷の議論については、2014年7月5日の大阪大学での講演 ‘Rethinking relative clause’ のスライド ([http://www.let.osaka-u.ac.jp/eigogaku/Matt\\_Shibatani\\_koenkai.pdf](http://www.let.osaka-u.ac.jp/eigogaku/Matt_Shibatani_koenkai.pdf) 2016年3月31日閲覧) や、2014年11月7日の東京外国語大学での講演「関係節再考」の要旨 ([http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/images/20141107koenkai\\_abs.pdf](http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/images/20141107koenkai_abs.pdf) 2016年3月31日閲覧) も参照されたい。

<sup>3</sup> カエ方言は、主にタンザニア連合共和国・ザンジバル、ウングジャ島南部のマクンドゥチ郡で話されるスワヒリ語の地域変種の一つである。一般に「スワヒリ語」として知られる標準スワヒリ語とは、語彙、音調、名詞や動詞の屈折形式など、多くの点で違いがみられる。本稿で提示する例文は、特に述べない限り、マクンドゥチ郡北部カジェングワ出身で、今もそこに住む50代男性から得られたものである。

<sup>4</sup> Racine-Issa (2002: 153 - 170) 参照。

<sup>5</sup> 接頭辞 *o* は名詞クラスによって形式が異なる。Co という形式で現れることが多いため、本稿では便宜上、*o* という表記で代表させる。詳しくは、2.1 節を参照されたい。

クされたコピュラ動詞に定形節が後続するもの ((2d) (4b)) に分けることができる。これらの形式は「関係節」と呼ばれるが、以下に示す通り「先行詞」無しで項となり得る。

- (2) a. [*m*<sup>6</sup>-na-tenda                  kazi] ka-cha-vata                  pesa<sup>7</sup>  
           G1.SM.NMLZ-IPFV-do work 3SG/G1.SM-IRR-get money  
 b. [*a-na-e-tenda                                  kazi] ka-cha-vata                  pesa  
           3SG/G1.SM-IPFV-G1.NMLZ-do work 3SG/G1.SM-IRR-get money  
 c. [*mw-a-wa                                  ka-na-tenda                  kazi sasa] ka-cha-vata                  pesa  
           G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-do work now 3SG/G1.SM-IRR-get money  
 d. [*a-ø-e-wa                                  ka-na-tenda                  kazi sasa] ka-cha-vata                  pesa  
           3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-IPFV-do work now 3SG/G1.SM-IRR-get money  
 「仕事をする人はお金を得るだろう」(主語の例)***

- (3) a. *nyi-m-kut'u                                  [m-na-kwea                                  m̄nazi]*  
           1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF G1.SM.NMLZ-IPFV-climb coconut tree  
 b. *nyi-m-kut'u                                  [mw-a-wa                                  ka-na-kwea                                  m̄nazi]*  
           1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-climb coconut tree  
 「私はヤシの木に登っている人を見た」(目的語の例)

- (4) a. [*N-ne-vyo-funga]                                  vi-chukue  
           1SG.SM-INCH-G8.NMLZ-tie G8.OM-take.SUBJ  
           「わたしが縛ったもの(袋)はもっていきなさい」  
 b. [*vi-ø-vyo-wa                                  ha-ja-vi-funga]                                  vy-ache  
           G8.SM-PRF-G8.NMLZ-COP 3SG/G1.SM.NEG-INCH.NEG-G8.OM-tie G8.OM-leave.SUBJ  
           「彼が縛っていないもの(袋)は置いておきなさい」(目的語の例)**

上記の例を「関係節」として記述するのであれば、「先行詞」のない例は、「先行詞」が省略されていると分析されるかもしれない。カエ方言には名詞クラスと呼ばれる名詞分類が存在する。接頭辞 *m* や *o* は名詞クラスと一致する接頭辞として分析できる。このことから (2) (3) では *mt'u* 「人」、(4) では *vipolo* 「袋」が省略されていると考えられるかもしれない<sup>8</sup>。しかし、「先行詞」が省略されているとは仮定できない例が存在する。

<sup>6</sup> カエ方言の音素目録は以下のように提示できる。母音 /i, e [ɛ], a, o [ɔ], u/, 無声無気閉鎖音 /p, t, k/, 無声無気破擦音 /ch [tʃ]/、有気閉鎖音 /p' [pʰ], t' [tʰ], k' [kʰ]/、有気破擦音 /ch' [tʃʰ]/、前鼻音化阻害音 /mb, nd, nj [ndʒ], ng [ŋg]/、入破音 /b [β], d [d̪], j [j̪], g [g̪]/、摩擦音 /f [f], v [β], th [θ], dh [ð], s, z, sh [ʃ], gh [ɣ], h/, 鼻音 /m, n, ɲ, ny [ɲ], ng' [ŋ], N/, 流音 /l, r/, 接近音 /y [j], w/. /m, N/ は成節的鼻音である。/N/ の調音点は未指定で後続する子音に同化する。[ ] 内の表記は IPA によるより近似的な音価である。本稿では [ ] 外の表記を用いる。この表記は概ね標準スワヒリ語の正書法に対応する。

<sup>7</sup> 本稿では準体言化標識である接頭辞を太字で、準体言を [ ] で括り提示する。

<sup>8</sup> 実際、(4) の例を確認する際は、*vipolo* 「袋」があるという文脈を設定している。

- (5) a. *ku-v-ijua*<sup>9</sup> [a- $\emptyset$ -*vyo-tenda* Juma leo]  
 2SG.SM-G8.OM-KNOW.PRF 3SG/G1.SM-PRF-G8.NMLZ-do Juma.PN today  
 b. *ku-v-ijua* mambo [a- $\emptyset$ -*yo-tenda* Juma leo]  
 2SG.SM-G8.OM-know.PRF matter 3SG/G1.SM-PRF-G6.NMLZ-do Juma.PN today  
 「ジュマが今日やったこと知ってる？」
- (6) *ku-v-ijua* [i-na-*vyo-ligwa*]  
 2SG.SM-G8.OM-know.PRF G9.SM-IPFV-G8.NMLZ-eat.PASS  
 「(マンゴーの) 食べ方 (食べられ方) 知ってる？」
- (7) [a-na-*vyo-tenda* kazi] ka-na-lawa jasho  
 3SG/G1.SM-IPFV-G8.NMLZ-do work 3SG/G1.SM-IPFV-get out sweat  
 「仕事をするとき、彼は (いつも) 汗をかく」
- (8) [a- $\emptyset$ -*vyo-ja*<sup>10</sup>-wa ka-na-tembea] ka-m-ono mwalimu  
 3SG/G1.SM-PRF-G8.NMLZ-come-COP 3SG/G1.SM-IPFV-walk 3SG/G1.SM-3SG/G1.OM-see.PRF teacher  
 「彼は歩いていたとき、先生に会った」

(5a) と (5b) は同じ意味となる。(5b) では、*mambo* 「事」という 6 クラス名詞の「先行詞」があり、接頭辞 *o* はこの「先行詞」と一致している。しかし、(5a) は 8 クラスの接頭辞 *o* が現れているが、「先行詞」がなく、省略されていると考えられる適当な名詞もない。(6) は 8 クラス接頭辞 *o* でマークされ、方法を表している。方法を表す名詞として、*namna* 「方法」があるが、9/10 クラス名詞で、8 クラスの形式である *o* と一致しないことから、(6) の「先行詞」としては考えられない。(7) (8) は 8 クラスの接頭辞 *o* でマークされ、時を示す副詞節を形成する例である。*wakati* 「時」という名詞がこうした節に前接することもあるが、*wakati* は 3 クラス<sup>11</sup>名詞でこれも「先行詞」とは考えられない。

本稿では、(2) - (8) の例を踏まえ、これまで「関係節」とみなされてきた形式を柴谷のいう準体言として記述を行う。

1 節では、本稿での議論に関わる名詞クラスと呼ばれる名詞分類と定動詞の構造、コピュラ動詞、非動詞述語について説明する。続く 2 節で準体言の形式的特徴を記述する。3 節では、項として機能する準体言の特徴をより詳細に記述する。4 節では、主名詞 (先行詞) を

<sup>9</sup> *ijua* 「知る」という動詞は目的語接辞なしで目的語が現れることも可能だが、実際の使用を見ると目的語接辞でマークされるのが一般的である。目的語が後続する場合、(5b) のように目的語の主名詞の名詞クラスが 8 クラスでなくとも、*ijua* 「知る」という動詞は 8 クラスの目的語接辞 *vi* でマークされることがある。

<sup>10</sup> *ja* 「来る」という動詞は、AM 接辞 *na* 「未完結」、*cha* 「未実現」と共起する際は、発話時より後の事態を、*li* 「完結否定」、*a/∅* 「完了 (準体言)」と共起する際は発話時より前の事態を表す標識として機能する。

<sup>11</sup> スワヒリ語規範文法では、*wakati* 「時」は 11 クラスの名詞に分類されるが、本稿では後述する通り、11 クラスを 3 クラスと別のクラスとして設定しない。

修飾する際の名詞句内の語順を記述する。5 節では、準体言内の語順を準体言標識との相対的位置に着目して記述する。

## 1 カエ方言文法概要

本節では、カエ方言の文法の中でも、準体言と関連する部分について説明する。具体的には名詞クラスと呼ばれる名詞分類、定動詞の構造、コピュラ動詞 *wa*、非動詞述語 *na* について述べる。

### 1.1 名詞クラスについて

他の多くのバントゥ系言語と同様に、カエ方言にも名詞クラスと呼ばれる名詞分類が存在する。バントゥ諸語研究やスワヒリ語研究では、一般に、名詞接頭辞の形式、一致要素の形式、複数形の形式などに基づき、名詞は分類されるが (Katamba 2003: 103, 112, Contini-Morava 1994)、本稿では、名詞クラスを文法的性と同様の分類と捉え<sup>12</sup>、名詞と一致する要素の形式にのみ基づき分類する。このように分類すると、1~10、15、16、18 と番号が付される 13 のクラスに分けることができる。この番号はバントゥ諸語研究で共通して用いられるものに従っている。Racine-Issa (2002: 30 - 49) は、標準スワヒリ語と同様に 11 クラス、17 クラスも認めているが、本稿では、この二つを独立したクラスとしてたてていないことに留意されたい。これは一致形式にのみ基づき分類した場合、この二つはそれぞれ、3 クラス、15 クラスとは別のクラスとみなすことができないためである。

1~10 クラスについては、基本的に奇数番号に属する名詞が単数、続く偶数番号に属する名詞がそれに対応する複数となる。15、16、18 はそれぞれ、動詞不定形 (15 クラス)、場所名詞 (15, 16, 18 クラス) のクラスとなる。

多くの名詞は、[接頭辞-語根] と分析することができ、接頭辞の形式はそれぞれのクラスで、概ね一貫している。多くの形容詞も同様に分析することができる。名詞を修飾する要素 (指示詞、所有詞、属辞、形容詞)、名詞と一致する動詞の接頭辞 (主語接辞、目的語接辞、準体言化接辞) は名詞クラスによって形式が異なる。以下にそれぞれのクラスの代表的な名詞と名詞修飾要素の形式を提示する。動詞に付加される接頭辞は後述する。

表 1：名詞とその一致要素の形式

	名詞	指示詞近称	所有詞「私の」	形容詞「よい」
1	<i>mt'u</i> 「人」	<i>yuno</i>	<i>yangu</i>	<i>ɱzuri</i>
2	<i>wat'u</i> 「人」 (複数)	<i>wano</i>	<i>wangu</i>	<i>wazuri</i>
3	<i>ɱkono</i> 「腕」	<i>uno</i>	<i>wangu</i>	<i>ɱzuri</i>
4	<i>mikono</i> 「腕」 (複数)	<i>ino</i>	<i>yangu</i>	<i>mizuri</i>

<sup>12</sup> これに伴い、名詞クラスを表すグロスとして G 'gender' を用いることとする。

	名詞	指示詞近称	所有詞「私の」	形容詞「よい」
5	<i>tunda</i> 「果物」	<i>lino</i>	<i>lyangu</i>	<i>zuri</i>
6	<i>matunda</i> 「果物」(複数)	<i>yano</i>	<i>yangu</i>	<i>mazuri</i>
7	<i>kit'u</i> 「物」	<i>kino</i>	<i>changu</i>	<i>kizuri</i>
8	<i>vit'u</i> 「物」(複数)	<i>vino</i>	<i>vyangu</i>	<i>vizuri</i>
9	<i>nguo</i> 「服」	<i>ino</i>	<i>yangu</i>	<i>zuri</i>
10	<i>nguo</i> 「服」(複数)	<i>zino</i>	<i>zangu</i>	<i>zuri</i>
15	<i>mahaa</i> 「場所」	<i>kuno</i>	<i>kwangu</i>	<i>kuzuri</i>
16	<i>mahaa</i> 「場所」	<i>vano</i>	<i>vangu</i>	<i>vazuri</i>
18	<i>mahaa</i> 「場所」	<i>mno</i>	<i>mwangu</i>	<i>muzuri~mzuri</i> <sup>13</sup>

それぞれの名詞クラスの意味的特徴を把握することは容易ではない。ここでは本稿との議論と関わる部分について説明する。1/2 クラスの名詞はすべて有生物を指示対象とする。ただし、有生物を指示対象とする名詞の中には、他のクラスに属するものもある。親族名称の一致要素の形式は概ね 1/2 クラスのものであるが、所有詞のみ 9/10 クラスとなる。所有詞の形式まで考慮にいれ名詞を分類するのであれば、親族名称は 1/2 クラス、9/10 クラスとは別のクラスに属するものとみなされるが、本稿では便宜上、その一致形式に 1/2 クラス、または 9/10 クラスのグロスを付すこととする。8 クラスの一致要素は、(6)~(8) でも示した通り、8 クラスの主名詞と一致する以外に、様態や方法、時間を表す際に現れることがある。15、16、18 クラスの名詞は場所を指示対象とする。それぞれのクラスの詳細な違いは別稿に譲るが、例えば、それぞれのクラスの名詞は、概ね以下のような場所を表す際に用いられると考えられる。

15 クラス：所与の文脈から把握できない不定の場所。

16 クラス：所与の文脈から把握できる定の場所。

18 クラス：ある場所、モノの内部。

なお、15、16、18 クラスに属する一般名詞は、表 1 に挙げた *mahaa* 以外は、他のクラスに属する名詞に *ni* という接尾辞を付したものとして分析可能である。

## 1.2 定動詞の構造

定動詞の構造は以下のように一般化できる。

(9) (否定接辞) — 主語接辞 — (AM 接辞) — (目的語接辞) — 語幹

### 1.2.1 語幹

非借用語の動詞は、語幹を「語基—末尾辞」と分析すると、末尾辞の形式に応じて、基本

<sup>13</sup> 18 クラスの *muzuri* の *mu* と主語接辞の *mu* は成節鼻音 *m̩* と自由交替する。

語幹、完了語幹、接続語幹という三つのタイプに分けることができる。このうち基本語幹と完了語幹が定動詞中に現れる。なお、本稿では基本語幹を動詞の引用形式として提示する。

基本語幹は、動詞にかかわらず、[語基-a]となる。完了語幹は動詞によって形式が異なる。接続語幹は、動詞にかかわらず、語幹の形式は[語基-e]となる。以下に完了語幹の一般化した形式と対応する動詞の基本語幹、接続語幹の形式を提示する。

表 2：非借用語動詞の語幹の形式

	完了語幹	基本語幹	接続語幹
完了語幹 1	...CV <sub>1</sub> (C)-V <sub>1</sub>	...CV <sub>1</sub> (C)-a	...CV <sub>1</sub> (C)-e
完了語幹 2	...C(V)w-a	...C(V)w-a	...C(V)w-e
完了語幹 3	...V <sub>m</sub> C-u	...V <sub>m</sub> C-a	...V <sub>m</sub> C-e
完了語幹 4	C-a	C-a	C-e
完了語幹 5	C-i	C(w)y-a	C(w)y-e
完了語幹 6	C-u	Cw-a	Cw-e

完了語幹 1 は最も一般的な形式である。語基の最終母音と同じ母音が末尾辞として現れる。

完了語幹 2 は語基が *w* で終わるタイプで、末尾辞は基本語幹同様に、*a* となる。完了語幹 2 の *w* は多くの場合、受動を表す派生接尾辞と分析できる。しかし、*chewa*「遅れる」、*fanikiwa*「成功する」のように、受動を表さず、また、対応する派生前の語基のない語幹も完了語幹 2 に含まれる。また *lewa*「酔う」のように、語基が *w* で終わっていても、完了語幹 1 に分類される動詞も存在する。

完了語幹 3 は、語基の最後の子音の直前に成節鼻音 *m*<sup>14</sup> が現れるタイプで、末母音は *u* となる。

完了語幹 4、5、6 の語幹は概ね一音節である。

完了語幹 4 は、基本語幹と同様に *Ca* という形式となる。このタイプの動詞としてはコピー動詞 *wa*、*ja*「来る」、*k'a*「与える」が挙げられる。

完了語幹 5 は基本語幹が [C(w)y-a] となるタイプで、完了語幹の末尾辞は *i* となる。このタイプの動詞としては *lya*「食べる」、*nya*「雨が降る、糞をする」、*nywa*「飲む」が挙げられる。

完了語幹 6 は基本語幹が [Cw-a] となるタイプで、末尾辞は *u* となる。このタイプの動詞としては、*fwa*「死ぬ」、*gwa*「落ちる」、*pwa*「潮が引く」、*ivwa*「熟す」(非一音節語幹)が挙げられる。

なお、*cha*「夜が明ける」、*chwa*「日が沈む」、*ijua*「知る」、*ta*「卵を産む」、*langaNza*「修理する」<sup>15</sup>の完了語幹はどのタイプにも当てはまらない不規則な形式となる。以下にこれらの完了語幹と基本語幹を提示する。

<sup>14</sup> 成節鼻音は通時的には、\**mu* という形式が再建されている (Nurse & Hinnebusch 1993: 183 - 185)。

<sup>15</sup> 話者によっては、*langaNza* ではなく、*langamza* という形式を用いる。*langamza* という基本語幹に対応する完了語幹は、*langamzu* となり、完了語幹 3 の形式となる。

表 3：不規則な形式の完了語幹

完了語幹	基本語幹	接続語幹
<i>che</i>	<i>cha</i>	<i>che</i>
<i>chwe</i>	<i>chwa</i>	未調査
<i>ijua/iji</i>	<i>ijua</i>	<i>ijue</i>
<i>ti</i>	<i>ta</i>	未調査
<i>langaNzi</i>	<i>langaNza</i>	<i>langaNze</i>

なお、*ijua*「知る」の肯定形での完了語幹の形式は、基本語幹と同様である。否定形では、*iji* という形式が現れるが、この形式から推測される、\**-ija* という形式の基本語幹は存在しない。

借用語動詞は語根そのものが語幹となるものと、[語根—派生接尾辞—末尾辞]と分析できるものに分けられるが、前者については、基本語幹、完了語幹の別はない<sup>16</sup>。後者については、基本語幹の末尾辞は常に *a* となる。完了語幹は、基本的に完了語幹 1 の通り、語基の最終母音と同じ母音が末尾辞として現れる。ただし、受動を示す派生接尾辞が現れる場合は、完了語幹 2 の通り、完了語幹の形式は基本語幹と同じとなる。

### 1.2.2 主語接辞と目的語接辞

主語接辞は、主語の主名詞の人称もしくは名詞クラスに一致する接頭辞で、義務的に現れる<sup>17</sup>。

目的語接辞は、目的語の主名詞の人称もしくは名詞クラスに一致する接頭辞で、目的語があっても現れない場合がある。

以下に、定動詞中に現れる、主語接辞と目的語接辞を提示する。語幹が母音で始まる動詞の中には、直前に現れる接頭辞と融合するものがある。こうした動詞と融合した場合の主語接辞や目的語接辞の形式は以下には提示しない。詳しくは、Racine-Issa (2002: 79-91) を参照されたい。

表 4：定動詞中の主語接辞と目的語接辞の形式

	主語接辞	目的語接辞
1 人称単数	<i>nyi/N</i> <sup>18</sup>	<i>nyi/N</i>
1 人称複数	<i>tu</i>	<i>tu</i>
2 人称単数	<i>ku</i>	<i>ku</i>
2 人称複数	<i>ḡ/mu</i> <sup>19</sup>	<i>ku~ḡ/mu</i> <sup>20</sup>

<sup>16</sup> *tafuta*「探す」、*hara*「腹を下す」は語根そのものが語幹となる借用語動詞だが、完了形はそれぞれ *tafutu*、*hara*、接続形が *tafute*、*hare* となり語末の *a* が末尾辞として再分析されていると考えられる。

<sup>17</sup> ただし、主語が 1 人称単数で、AM 接辞が *na* の場合、主語接辞は現れない。

<sup>18</sup> 子音で始まる接頭辞、語幹が後続する場合、1 人称単数の主語接辞は *N* という形式と自由交替が容認される。筆者の観察の限り、実際に使用される際は、後続する形態素の初頭音が母音性をもたない場合、弱化した形式で現れることが多い。

	主語接辞	目的語接辞
3 人称単数・1 クラス	<i>ka</i>	<i>ḡ/mu</i> <sup>21</sup>
3 人称複数・2 クラス	<i>wa</i>	<i>wa</i>
3 クラス	<i>u</i>	<i>u</i>
4 クラス	<i>i</i>	<i>i</i>
5 クラス	<i>li</i>	<i>li</i>
6 クラス	<i>ya</i>	<i>ya</i>
7 クラス	<i>ki</i>	<i>ki</i>
8 クラス	<i>vi</i>	<i>vi</i>
9 クラス	<i>i</i>	<i>i</i>
10 クラス	<i>zi</i>	<i>zi</i>
15 クラス	<i>ku</i>	<i>ku</i>
16 クラス	<i>va</i>	<i>va</i>
18 クラス	<i>ḡ~mu</i> <sup>22</sup>	<i>ḡ~mu</i>

### 1.2.3 AM 接辞

定動詞中には、以下に挙げるアスペクト・ムードを表す接頭辞が現れる。*na*「未完結 (imperfective)」、*cha*「未実現 (irrealis)」、*me*「起動 (inchoative)」、*mena*「起動進行 (inchoative-progressive)」、*li*「完了否定 (negative perfect)」、*ja*「起動否定 (negative inchoative)」。なお、これらの AM 接辞が現れる際の語幹はすべて基本語幹となる。完了語幹は AM 接辞と共起しない。

### 1.2.4 極性

否定極性は *ha* という接頭辞で表される<sup>23</sup>。*na*「未完結」、*cha*「未実現」、完了語幹は否定接辞と共起することができる。*me*「起動」、*mena*「起動進行」は否定接辞と共起できない。*li*「完了否定」、*ja*「起動否定」は義務的に否定接辞と共起する。

なお、完了語幹が否定接辞と共起する場合、「～しなかった」「まだ～していない」という

<sup>19</sup> 直前の接頭辞と融合しない母音ではじまる語幹が後続する場合、*mu* となる。子音で始まる接頭辞、語幹に後続する場合、*ḡ* と *mu* が自由交替する。

<sup>20</sup> 目的語が 2 人称複数となる場合、目的語接辞だけでなく、動詞語幹の直後に *ni* という接語が現れる。この接語は複数の聞き手に呼びかける際に現れる。目的語接辞は *ku* と *ḡ/mu* が自由交替する。*ḡ* は、後続する語幹の初頭音が母音性を持たない場合現れる。*mu* は後続する語幹が母音性をもち、なおかつ、語幹が直前の接頭辞と融合しない場合に現れる。

<sup>21</sup> *ḡ* は、後続する語幹の初頭音が母音性を持たない場合現れる。*mu* は後続する語幹が母音性をもち、なおかつ、語幹が直前の接頭辞と融合しない場合に現れる。

<sup>22</sup> 後続する形態素が母音で始まる場合、*mu* となる。後続する形態素が子音で始まる場合、*mu* と *ḡ* が自由交替する。

<sup>23</sup> ただし、主語が 1 人称単数、2 人称単数、3 人称単数の場合は、主語接辞とのかばん形態素となる。それぞれの形式は *si*, *hu*, *ha* となる。



意味にはならず、「(これから) ~しない」という意味になる<sup>24</sup>。完了の肯定は完了語幹が現れる動詞によって表されるが、完了の否定は、*li*「完了否定」で基本語幹がマークされることにより表される。

表 5：定動詞の AM 接辞の形式、語幹の形式、否定接辞との共起関係

	AM 接辞の形式	語幹の形式	否定接辞との共起
未完結	<i>na</i>	基本語幹	可
未実現	<i>cha</i>	基本語幹	可
起動	<i>me</i>	基本語幹	不可
起動進行	<i>mena</i>	基本語幹	不可
完了否定	<i>li</i>	基本語幹	義務
起動否定	<i>ja</i>	基本語幹	義務
完了	$\emptyset$	完了語幹	可

### 1.3 コピュラ動詞 *wa* について

詳しくは 2.2 節で後述するが、準体言はコピュラ動詞 *wa* を介して形成されることもある。ここでは、コピュラ動詞 *wa* の基本的な特徴を説明する。

コピュラ動詞 *wa* の基本的用法として、主語の状態変化を示す用法と主語の場所を示す用法がある。

*wa* が AM 接辞でマークされる場合は、基本的にその AM 接辞に応じたアスペクトやムードに関する情報が表される。しかし、完了に活用した場合（以下コピュラ完了形）、他の多くの動詞とは異なり基準時以前の事象の終了は表さず、単にコピュラ節を形成する機能のみを担う。コピュラ完了形に後続するのは、①主語の性質や状態を示す要素、②主語の所有者を表す要素、③主語の存在する場所を示す要素である。コピュラ完了形では状態変化は表さない。このコピュラ完了形に対応する否定形は「否定接辞—主語接辞—*li*」という形式である。この *li* という形態素は非動詞述語として分析できる<sup>25</sup>。

コピュラ動詞 *wa* にはこれ以外に、定形節にアスペクトやムードに関する情報を付加する用法もある。この場合、*wa* は具体的意味をもたず、AM 接辞を表示する支えとして用いられる。コピュラをマークする AM 接辞としては、*cha* がよく観察されるが、*na*、*me*、*mena* も現れる。(10) の四角で囲った部分が付加的に用いられるコピュラ動詞である。

- (10) 

<i>ka-cha-wa</i>	<i>ka-na-tenda</i>	<i>kazi</i>
3SG/G1.SM-IRR-COP	3SG/G1.SM-IPFV-do	work

 「彼は仕事をしているだろう」

<sup>24</sup> ただし *ijua*「知る」と *goma*「できる」の完了語幹が否定接辞と共起する場合は、単に「知らない」、「できない」という意味になる。

<sup>25</sup> *li* はサバキ祖語の \**li-* ‘be’ (Nurse & Hinnebusch 1993: 649) に遡ると考えられる。

## 1.4 非動詞述語 *na* について

所有を表す際は〔(否定接辞)－主語接辞－*na*〕という要素が述語として機能する。この *na* という形態素は、*na* 「未完結」、*mena* 「起動進行」以外の AM 接辞と共起でき、動詞に似たふるまいをみせるが、不定形を形成する接頭辞 *ku* を付加することはできない<sup>26</sup>。この非動詞述語 *na* を用いて、準体言が形成されることもあるが、その際の形式は 2.4 節で説明する通り、ほかの動詞の場合とは異なる。なお、15、16、18 クラスの主語接辞で *na* がマークされた場合、*na* に後続する名詞が指示する対象が存在することを表す。

## 2 準体言の形式的特徴

本節では、0 節で示した四つの準体言形成法の形式的特徴について説明する。

### 2.1 接頭辞タイプ

ここでは動詞語幹に接頭辞を付加する準体言形成法について述べる。接頭辞タイプの準体言形成法としては、準体言化接辞 *m* を付加するタイプ ((2a) を参照、以下タイプ 1) と、準体言化接辞 *o* を付加するタイプ ((2b) を参照、以下タイプ 2) がある。以下に一般化した形式を示す。

(11) *m*－(否定接辞)－AM 接辞－(目的語接辞)－語幹 (タイプ 1)

(12) 主語接辞－(否定接辞)－(AM 接辞)－(目的語接辞)－*o*－語幹 (タイプ 2)

タイプ 1 の修飾する主名詞は 1 クラスに属している。またタイプ 1 によって準体言化される項(準体言内の欠けている項)は主語だけである。このタイプ 1 の準体言化接辞 *m* は、多くの 1 クラスの名詞、形容詞の語頭に現れる接頭辞 *m* と同形である。そして、1 クラスに属する名詞は単数の有生物を指示対象とする。この事実を踏まえると、タイプ 1 の *m* という接頭辞は、1 クラスの名詞接頭辞と歴史的には同源である可能性が指摘できる<sup>27</sup>。

タイプ 2 の準体言化接辞 *o* は、先行詞の名詞クラスによって形式が異なる。表 6 にクラスごとの関係節接辞の形式を挙げる。表 6 に挙げるものは、概ね Racine-Issa (2002: 156) でも提示されている。ただし、1 クラスの *e* という形式は記述されていない。また、*ye~yo* は AM 接辞が現れない際に現れうる異形態であるが、これも記述されていない。AM 接辞がない場合 1 クラスの三つの形式は自由交替する。AM 接辞が現れる場合は *e* となる。

<sup>26</sup> 不定形を形成する接頭辞 *ku* が付加できるかどうか、動詞かどうかを分ける基準となる。*na* や *li* には接頭辞 *ku* は付加できない。

<sup>27</sup> ちなみに筆者の知る限り、いずれの先行研究でも「関係節」としては説明されていないが、標準スワヒリ語でも接頭辞 *m* でマークされた動詞が項をとり準体言を形成しているように見える例が存在する。例：*m-piga konde ukutani hu-umiza mkonowe* (M-hit fist wall.LOC HAB-hurt his hand) 「拳を壁に打ち付けるものは自身の手を痛める」(Ashton 1947: 292)

表 6：準体言化接辞の形式

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	15	16	18
<i>e/ye ~yo</i>	<i>o</i>	<i>o</i>	<i>yo</i>	<i>lyo</i>	<i>yo</i>	<i>cho</i>	<i>vyo</i>	<i>yo</i>	<i>zo</i>	<i>ko</i>	<i>vo</i>	<i>mo</i>

同様の準体言化接辞は標準スワヒリ語のような他変種にも存在する。Nurse & Hinnebusch (1993: 406) は、「関係節」接辞を名詞クラス標識と *o* に分け、*o* はサバキ祖語/北東沿岸バントゥ祖語<sup>28</sup>の直示的接尾辞に遡ると述べている。カエ方言では、この準体言化接辞と同じ形式の接尾辞<sup>29</sup>が代名詞として機能する。非動詞述語で所有を表す [主語接辞—*na*]、随伴を表す前置詞 *na*<sup>30</sup>、提題を表す *ndi* に後続して現れる<sup>31</sup>。これらの要素と共起する接尾辞は、準体言を形成することはなく、先行文脈に現れたものを示す代名詞として働く。また、指示詞から「関係節」標識への文法化は、他のバントゥ諸語でも指摘されている (Poulos 1986: 291-3)。これらを考慮すると、「関係節」接辞が直示的接尾辞に由来するという Nurse の分析は、それほどおかしなものではないだろう。なお、Nurse & Hinnebusch は (y)e という 1 クラスの「関係節」接辞の歴史的由来については言及を避けているが、*yeye* という 3 人称単数の独立代名詞との関連が疑われる。「関係節」中では (y)e しか現れないが、前置詞 *na* のあとには (y)e だけでなく、*mi* (1 人称単数)、*we* (2 人称単数) という接辞も現れることが確認されている。カエ方言では、1 人称単数の独立代名詞は *mie*、2 人称単数は *weye* という形式である。

タイプ 2 で準体言化される項の統語的制限はタイプ 1 と比較するとだいぶゆるい。主語、目的語、斜格目的語、所有格が準体言化される。ただし、有標の斜格目的語<sup>32</sup>で先行詞となるのは、随伴を表す *na* でマークされる項のみで、道具や場所などを表す *kwa*<sup>33</sup>、受動文の動作主を表す *nyi/N*<sup>34</sup>でマークされる項は先行詞とならない。また、所有関係は、所有物が準体言内で目的語の場合、タイプ 2 の形式で準体言化されるが、主語の場合はならない。有標の斜格目的語、所有格が準体言化される場合は、準体言化接辞以外に、準体言化される項と一

<sup>28</sup> Nurse & Hinnebusch (1993) はスワヒリ祖語の前段階として、サバキ祖語、北東沿岸バントゥ祖語を再構している。

<sup>29</sup> 指示詞中称の弱化形 (Racine-Issa 2002: 69) も準体言化接辞と同形で、これも着目すべき点だが、準体言化接辞、代名詞接尾辞とは別の語彙素と考えられる。弱化形は、指示対象に応じて、近称や、遠称と交替するが、準体言化接辞や代名詞接辞は、指示対象が、例えば、近称で指示されるものであっても形式は変わらない。

<sup>30</sup> 日本語の「～とともに」、「～も」に対応するような意味を表す。

<sup>31</sup> [主語接辞—*na*] や、前置詞 *na* には他の名詞も後続する。*ndi* にはこの接尾辞しか後続しない。ほかの名詞を提題化するときは、*njo* という要素が提題化される名詞の直前に現れる。

<sup>32</sup> 斜格目的語の中には、*ny-uzu gari yangu pesa zino* (1SG.SM-sell.PRF car my.G9 money this.G10) 「私はこの金で私の車を売った」の *pesa zino* 「この金」のように、前置詞でマークされることのない、無標のものも存在する。こうした無標の斜格目的語が準体言化される場合は、準体言化される項と一致する標識は準体言化接辞のみである。

<sup>33</sup> 標準スワヒリ語において *kwa* という前置詞は、形式的には 15 クラスの属辞だが、道具や場所を表す標識として機能することが知られる (Ashton 1947: 171 - 173)。カエ方言でも同様の用法がある。場所を表す際は、*kwa Juma* (of.G15 Juma.PN) 「ジュマのところ」という例にみられる通り、後続する名詞が指すものが存在する場所を表す。

<sup>34</sup> 子音で始まる語が後続する場合、*nyi* は *N* に弱化することがある。この前置詞の形式は 1 人称単数の主語接辞と同じであり、同じように弱化しているといえる。

致する別の標識が現れる。(13) は随伴の *na* でマークされた項が準体言化される例である。準体言中の *na* の後にも準体言化接辞と同形の代名詞が現れる。(14) は所有格が準体言化される例である。準体言中に、所有詞が現れる。それぞれの例で、準体言接辞以外で、準体言化される項と一致する要素には下線を引く。

- (13) *mwanakele [N-cha-e-kwenda<sup>35</sup>        m̄jini        na=e]*  
 child        1SG.SM-IRR-G1.NMLZ-go town.LOC with=G1.PRO  
 「私が一緒に街に行く子供」(斜格目的語)

- (14) *mwanafuzi [nyi-ø-e-m̄-kut'a        baba ake        jana]*  
 student        1SG.SM-PRF-G1.NMLZ-3SG/G1.OM-see father his.G9 yesterday  
 「昨日私が、その父親にあった生徒」(所有格)

タイプ1とタイプ2の準体言のAM接辞の形式、語幹の形式、否定接辞との共起関係は、定動詞とは必ずしも一致しない。表7はそれをまとめたものである。

表7：準体言（タイプ1、タイプ2）のAM接辞の形式、語幹の形式、否定接辞との共起関係

	AM接辞の形式		語幹の形式		否定接辞との共起	
	タイプ1	タイプ2	タイプ1	タイプ2	タイプ1	タイプ2
未完結	<i>na</i>	<i>na</i>	基本語幹	基本語幹	不可	不可
未実現	<i>cha</i>	<i>cha</i>	基本語幹	基本語幹	可	可
起動	<i>ne</i>	<i>me</i>	基本語幹	基本語幹	不可	不可
起動進行	<i>mena</i>	—	基本語幹	—	不可	—
完了否定	—	—	—	—	—	—
起動否定	—	—	—	—	—	—
完了	<i>a</i>	<i>ø</i>	基本語幹	基本語幹	不可	不可

タイプ1に現れるAM接辞は *na* 「未完結」、*cha* 「未実現」、*ne* 「起動」、*mena* 「起動進行」、*a* 「完了」である。*ne* は *me* との交替が容認されるが、話者が自発的に用いる形式は *ne* である。起動進行は *mena* のみが容認され、*mena* は容認されない<sup>36</sup>。完了否定や起動否定を示すAM接辞は現れない。なお、AM接辞 *a* 「完了」は、*mwa* という形で接頭辞 *m̄* と融合した形で現れる。Racine-Issa (2002: 154) は *mwa* という形式を積極的には分節せず、接頭辞 *m* とコ

<sup>35</sup> 一音節、及び一部の母音で始まる動詞語幹がAM接辞 *na* 「未完結」、*cha* 「未実現」、*me* 「完成」、*mena* 「起動」、*li* 「完結否定」、*nge* 「反実仮想」、準体言化接辞に後続する際、*ku* という無意味接頭辞を伴う。(13) では *enda* 「行く」に、(27) では *nywa* 「飲む」に、(45) では *lya* 「食べる」に、この *ku* が前接している。母音で始まる動詞語幹は直前の接辞と融合するという別の特徴もあるため、(13) の *ku* は *kw* となる。一音節語幹に付随する *ku* は、動詞の後に、別の要素（主語、目的語、副詞句）が後続する場合は現れないこともあるが、別の要素が後続しない場合は義務的に現れる。母音で始まる語幹については、*enda* 「行く」以外は義務的に *ku* が付随する。

<sup>36</sup> 定動詞をマークする、*me* 「起動」、*mena* 「起動進行」も *ne*、*mena* との交替が容認される。ただし、定動詞中に *ne*、*mena* が現れる例は自然発話の中では観察されていない。

ピュラ動詞 *wa* に分けられる可能性を指摘しているが、①他の AM 接辞と交替すること、②成節鼻音 *m* に母音 *a* が後続する場合、他の環境でも融合した *mwa* という形で現れること<sup>37</sup>、③他変種で「過去」の接辞として機能している *a* という接辞があること (Nurse & Hinnebusch 1993: 389) を踏まえると、AM 接辞と分析する方が妥当であろう。なお、*a* 「完了」でマークされた準体言の語幹は、定動詞とは異なり、基本語幹となる。

タイプ 2 に現れる AM 接辞は *na* 「未完結」、*cha* 「未実現」、*me* 「起動」、 $\emptyset$  「完了」である。起動進行、完了否定、起動否定を示す AM 接辞は現れない。タイプ 2 の  $\emptyset$  「完了」は他の AM 接辞との交替と統一的に説明するために便宜上提示する。「完了」の AM 接辞が現れないというのは定動詞の完了と共通する特徴だが、タイプ 2 では定動詞とは異なり、語幹は基本語幹となる。

タイプ 1、タイプ 2 で否定は、定動詞と異なり、*si* という接頭辞によって表されるが、この *si* が共起できる AM 接辞は *cha* 「未実現」のみである。準体言は AM 接辞なしで、準体言化接辞、主語接辞 (タイプ 2 のみ)、目的語接辞 (任意)、基本語幹、そして *si* で構成されることがあるが、その場合、AM に関する情報はマークされていないものと考えられる。

タイプ 2 の主語接辞は、定動詞中に現れる主語接辞と基本的に同形だが、2 人称単数、3 人称単数のみ異なる。定動詞ではそれぞれ、*ku*、*ka* となるが、タイプ 2 では *u*、*a* となる。タイプ 2 に現れるこれらの主語接辞の形式は、他の非定動詞に現れるものと同形である。

目的語接辞は定動詞と同様に、任意である。

## 2.2 コピュラを介して形成されるタイプ<sup>38</sup>

コピュラを介して形成される関係節にも二つのタイプが存在する。それぞれ、コピュラ動詞 *wa* が、準体言化接辞 *m*、もしくは準体言化接辞 *o* でマークされることから、タイプ 1 とタイプ 2 から派生的に形成されていると考えられる。こうした接頭辞でマークされたコピュラ動詞に、定動詞を主要部とする定形節が後続することで、準体言は形成される。以下に一般化した形式を示す。

(15) *m*—AM 接辞—*wa* 定形節 (タイプ 3)

(16) 主語接辞—AM 接辞—*o*—*wa* 定形節 (タイプ 4)

タイプ 3 で準体言化されるのは 1 クラス名詞だけである。タイプ 4 では名詞クラスに関する制限はない。

<sup>37</sup> 3 人称単数/1 クラスの目的語接辞は、子音で始まる語幹が後続する場合、成節鼻音 *m* だが、例えば *ambia* 「告げる」という動詞語幹が後続する場合、鼻音の成節性は失われ、直後の動詞 *ambia* の *a* と融合して一つの音節を形成する。例： *ch'a-mw-ambia* (1SG.SM.IRR-3SG/G1.OM-tell) 「私は彼に言うだろう」

<sup>38</sup> コピュラを介した「関係節」形成法は、筆者の知る限り他のバントゥ諸語の記述にはみられない。ただし、現段階では、他言語、他変種の記述を十分に精査したわけではないため、この指摘は注釈に留める。

コンピュータ動詞をマークする AM 接辞としては、タイプ 3 では *na* 「未完結」、*cha* 「未実現」、*ne* 「完成」、*a* 「完了」、タイプ 4 では *na* 「未完結」、*cha* 「未実現」、 $\emptyset$  「完了」がある。タイプ 3、4 の準体言のコンピュータ動詞に定形節が後続するという構造は、コンピュータを用いて定形節にアスペクトやムードに関する情報を付加する構造 (1.3 節参照) と並行的に捉えることができる。コンピュータ動詞が AM 接辞 *na*、*cha*、*ne* でマークされる場合は、(10) と同様にこれらの AM 接辞が担うアスペクトやムードに関する情報が準体言に付加されている一方で、完了の *a*、 $\emptyset$  でマークされる場合は、アスペクトに関する情報が付加されることなく、コンピュータは準体言を形成する標識としてのみ機能していると考えられる。

その理由としてまず、*a*、 $\emptyset$  でマークされたコンピュータに、*na*、*cha*、*me*、*mena* でマークされた定動詞、あるいは完了に活用した定動詞が後続するタイプ 3、4 の準体言と、*na*、*cha*、*ne/me*、*nena*、*a/\emptyset* でマークされたタイプ 1、2 の準体言の間に意味的な対立が生じないことが挙げられる<sup>39</sup>。

また、コンピュータ動詞に後続する定動詞のアスペクト・ムード、極性の制限もこの傍証となると考えられる。*cha*、*na*、*ne* でマークされたコンピュータ動詞に後続できる定形動詞には、アスペクト・ムード、極性に関して制限があるが<sup>40</sup>、これはコンピュータをマークする AM 接辞と、後続する定動詞の AM 接辞が表す情報の齟齬から生じる制限だろう。これに対して、コンピュータ動詞が *a* や  $\emptyset$  でマークされる場合、後続する定動詞のアスペクト・ムード、極性に制限はない。*a* や  $\emptyset$  でマークされるコンピュータ動詞には、タイプ 1、2 では準体言化できないような AM 接辞でマークされた定動詞も後続して準体言化される<sup>41</sup>。つまりタイプ 3、4 では、タイプ 1、2 とは異なり、定動詞で表されうるものと同様のアスペクトやムード、極性が準体言中で表されるようになっているといえる<sup>42</sup>。

なお、他の多くの動詞は、完了に活用した場合、基準時以前の事象の終了を含意するが、完了に活用したコンピュータ動詞は、単に「いる」「である」といった存在や状態の意味を表し、基準時以前の事象の終了を含意しない。これは、定形でも準体言でも変わらない。以下にそのことを示す準体言の例を挙げる。

<sup>39</sup> タイプ 3、4 の準体言でコンピュータ動詞が他の AM 接辞でマークされた場合に、タイプ 1、2 の準体言との間に意味的対立が生じているという事実が確認されれば、本稿の主張を支持することになるが、現段階でこれは残念ながら未確認である。

<sup>40</sup> *na*、*me* でマークされたコンピュータ動詞と、*na*、*ne* と準体言化接辞コンピュータ動詞には、ともに後続する動詞をマークすることのできる AM 接辞に制限があるが、この制限は現在確認している限りでは合致していない。また、容認される組み合わせでも、「分かるけど、使わない」とコメントされたり、日によって容認度が変わったりすることがたびたびある。

<sup>41</sup> ただし、タイプ 3、4 の準体言化接辞でマークされたコンピュータの AM 接辞 *cha* 「未実現」となる場合も、後続する定動詞をマークできる AM 接辞や極性に制限はない。1.3 節でも述べたが、コンピュータ動詞の定形が *cha* でマークされる場合も同様に後続する定形動詞をマークできる AM 接辞や極性に制限はない。

<sup>42</sup> 標準スワヒリ語にもタイプ 2 と同様の関係節形成法があり、AM 接辞に関して類似した制限がある。標準スワヒリ語では、コンピュータ動詞ではなく [amba-関係節接辞] という形式の標識を用いることで、制限が回避される (Ashton 1947: 110 - 114)。

(17) a. *mwanangu [mw-a-kwenda mjini jana]*  
 my child G1.SM.NMLZ-PRF-go town.LOC yesterday  
*ha-ja-rudi /ke-me-rudi*  
 3SG/G1.SM.NEG-INCH.NEG-return 3SG/G1.SM-INCH-return

b. *mwanangu [a- $\emptyset$ -e-kwenda mjini jana]*  
 my child 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-go town.LOC yesterday  
*ha-ja-rudi /ke-me-rudi*  
 3SG/G1.SM.NEG-INCH.NEG-return 3SG/G1.SM-INCH-return

「昨日街に行った私の子供はまだ戻ってきていない／もう戻って来た」

(18) a. *[mw-a-choka bado]*  
 G1.SM.NMLZ-PRF-be tired still

b. *[a- $\emptyset$ -e-choka bado]*  
 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-be tired still

「まだ疲れている人」

(17) は基準時以前の事象の終了を、(18) は基準時以前の事象の終了の結果生じた状態を表す<sup>43</sup>。AM 接辞の *a* や  $\emptyset$  でマークされた際にどちらを表すかは概ね動詞によって異なるが、ともに、基準時以前の事象の終了が含意されていると考えられる。これとは対照的に、コピュラ動詞は、*a* や  $\emptyset$  でマークされた場合、基準時以前の事象の終了を含意しない。(19) (20) は、それを示す例である。

(19) a. *uyoko mt'u mrefu njo=[mw-a-wa kaka angu]*  
 that.G1 person tall.G1 GVN=G1.SM.NMLZ-PRF-COP brother my.G9

b. *uyoko mt'u mrefu njo=[a- $\emptyset$ -e-wa kaka angu]*  
 that.G1 person tall.G1 GVN=3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP brother my.G9

「私の兄であるのはあそこの背の高い人だ」

(20) *embe [i- $\emptyset$ -yo-wa mbichi]*  
 mango G9.SM-PRF-G9.NMLZ-COP unripe

「未熟であるマンゴー」

コピュラ動詞 *wa* には変化を表す意味がある。しかし、(19) は少し離れたところにいる複数の人の中でどれが兄であるかを尋ねる問いに対する答えであり、「兄になる」という変化は想定しにくい。また (20) では、「マンゴーが未熟になる」という変化が想定しにくい。この二つの例から、*a*、 $\emptyset$  でマークされたコピュラ動詞 *wa* は、基準時以前のイベントの終了を含

<sup>43</sup> 定動詞の完了形は、これに加えて、「参照時以前の終了とその影響」を含意する。例えば、(17) の *enda* 「行く」という動詞の定動詞完了形は、「行った」ということを表すと同時に「まだ戻ってきていない」ということを含意する。

意しない状態を表すと考えられる。同じように *a*、 $\emptyset$  でマークされ基準時以前の事象の終了を含意しない動詞としては *ijua* 「知る」が挙げられる<sup>44</sup>。

定形であるコピュラ完了形と *m*コピュラ、*o*コピュラは表すアスペクトは等価である。しかし、前者には別の定形節が後続できず、後者には後続できる。コピュラを用いて定形節にアスペクトやムードに関する情報を付加する構造とタイプ 3、4 の準体言のコピュラ動詞に定形節が後続するという構造の最も大きな違いは、単にアスペクトやムードに関する情報を付加するだけか、これに加えて準体言を形成する機能も担っているかという点であろう。これらの事実を踏まえると、*a*、 $\emptyset$  でマークされたコピュラ動詞というのは、別の定形節に付加可能なアスペクトやムードを担わない形式が、準体言を形成することに特化した標識になっているとみなすことができるだろう。

以下の議論では、*a*、 $\emptyset$  でマークされたコピュラ動詞を準体言化標識とみなし、これらをそれぞれ、*m*コピュラ、*o*コピュラと呼ぶこととする。以下で、タイプ 3、タイプ 4 の関係節として提示する例も、この *m*コピュラ、*o*コピュラを介して形成されるものである。

統語的には、タイプ 3、4 とともに、主語、目的語、斜格目的語、所有格を準体言化することができる<sup>45</sup>。ただし、準体言化できる有標の斜格目的語は、タイプ 2 と同様に、随伴の *na* でマークされた項のみである。また、有標の斜格目的語、所有格が準体言化される場合は、準体言中に、準体言化標識以外にも、準体言化される項と一致する標識が現れる。この標識はタイプ 2 と同様に *na* でマークされる項の場合は準体言化接辞と同形の代名詞、所有格の場合は所有詞が現れる。以下の例では、準体言化される項と一致する標識に下線を付す。

- (21) a. *mwanakele* [*mw-a-wa* *N-cha-kwenda* *mjini* *na=e*]  
 child G1.SM.NMLZ-PRF-COP 1SG.SM-IRR-go town.LOC with=G1.PRO  
 b. *mwanakele* [*a- $\emptyset$ -e-wa* *N-cha-kwenda* *mjini* *na=e*]  
 child 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 1SG.SM-IRR-go town.LOC with=G1.PRO  
 「私が一緒に街に行く子供」(斜格目的語)

- (22) a. *mwanafuzi* [*mw-a-wa* *nyi-m-kut'u* *baba* *ake* *jana*]  
 student G1.SM.NMLZ-PRF-COP 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF father his.G9 yesterday  
 b. *mwanafuzi* [*a- $\emptyset$ -e-wa* *nyi-m-kut'u* *baba* *ake* *jana*]  
 student 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 1SG.SM-3SG/G1.OM-seePRF father his.G9 yesterday  
 「昨日私がその父親にあった生徒」(所有格)

*o*コピュラは主語接辞でマークされるが、AM接辞  $\emptyset$  「完了」でマークされる場合、この主語接辞は、(23) に示す通り、後続する定形節の主語と一致することも、主名詞と一致することも可能である。

<sup>44</sup> これ以外に *kaza* 「好ませる」、*chukia* 「嫌わせる」という動詞も形式的には「完了」であっても、機能的には「完了」を表さない動詞と考えられるが、現段階でこれを検証することはできていない。

<sup>45</sup> 比較の対象については、いったんは容認されたが、日を変えて再度確認したところ容認されなかった。実際の使用において、比較の対象は準体言化されない可能性が高い。



- (23) a. *mwanafuzi* [*u-ϕ-ye-wa*                      *ku-m-kut'u*                      *jana*]  
 student      2SG.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 2SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF yesterday (主語と一致)
- b. *mwanafuzi* [*a-ϕ-ye-wa*                      *ku-m-kut'u*                      *jana*]  
 student      3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 2SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF yesterday (先行詞と一致)  
 「あなたが昨日会った学生」

*m*コピュラや、*o*コピュラからコピュラ動詞 *wa* が省略されたような形式も、準体言化標識として機能する。ただし、*m*コピュラの省略形には定動詞が後続できる一方、*o*コピュラには定動詞は後続できない。なお、これらの形式については、話者自身もコピュラ動詞が省略されているという直観をもつ。

- (24) a. [*mw-a*                      *mwalimu*] *nani*  
 G1.SM.NMLZ-PRF teacher      who
- b. [*a-ϕ-e*                      *mwalimu*] *nani*  
 3SG/G1.SM-PRF- G1.NMLZ teacher      who  
 「先生であるのは誰」(叙述名詞が後続する例)

- (25) a. [*mw-a*                      *nyumbani*] *nani*  
 G1.SM.NMLZ-PRF house.LOC      who
- b. [*a-ϕ-e*                      *nyumbani*] *nani*  
 3SG/G1.SM-PRF- G1.NMLZ house.LOC      who  
 「家にいるのは誰」(場所名詞が後続する例)

- (26) a. *ng'ombe* [*mw-a*                      *ka-na-kunywa*                      *maji*]  
 cow      G1.SM.NMLZ-PRF 3SG/G1.SM-IPFV-drink      water
- b. \**ng'ombe* [*a-ϕ-e*                      *ka-na-kunywa*                      *maji*]  
 cow      3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ 3SG/G1.SM-IPFV-drink      water  
 「水を飲んでいる牛」(定形節が後続する例)

### 2.3 タイプ1-4の使い分けについて

ここまでの小括として、タイプ1からタイプ4までの準体言形成法において、準体言化できる項は以下のようにまとめることができる。

表8：統語的制限

	主語	目的語	斜格（無標）	斜格（有標）	所有格	比較の対象
タイプ1	✓	—	—	—	—	—
タイプ2	✓	✓	✓	✓	✓	—
タイプ3	✓	✓	✓	✓	✓	(✓)
タイプ4	✓	✓	✓	✓	✓	(✓)

表9：アスペクトとムード、極性に関する制限

	未完結	未完結否定	未実現	未実現否定	起動	起動否定	完了	完了否定	起動進行
タイプ1	✓	—	✓	✓	✓	—	✓	—	✓
タイプ2	✓	—	✓	✓	✓	—	✓	—	—
タイプ3	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
タイプ4	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓

表10：名詞クラスに関する制限

	1クラス	2-18クラス
タイプ1	✓	—
タイプ2	✓	✓
タイプ3	✓	—
タイプ4	✓	✓

ある項を準体言化する際にいくつかの方法がある場合、準体言化形成法の違いによって、意味的な違いは生じない。また、どのような条件で、どの準体言形成法が選択されるのかも現段階で明確には分からない。ただ、話者が自発的に発する例を観察する限りでは、複数の選択肢がある場合、制限のゆるいものよりも、制限のきついものが好まれるようである。例えば、準体言化される項が主語で、その名詞クラスが1クラス、アスペクトが未完結の場合、タイプ2-4ではなく、タイプ1が選ばれる。



ークされることもない。以下に一般化した形式を示す。

(31) [主語接辞-*li-o*]

なお、*li* は AM 接辞でマークされない。AM 接辞が現れる際は、コピュラ動詞 *wa* によって関係節は形成される。

### 3 項のタイプ

(2) - (4) で示した通り、カエ方言の準体言はその形成法にかかわらず、主名詞（先行詞）なしで節中の項となることができる。(2) - (4) は、主語や目的語となる例だが、以下にそれ以外の項となる例を挙げる。

- (32) a. *ny-ende*      *na=[m-na-kwendesha*      *baskeli]*  
 1SG.SM-go.PRF with=G1.SM.NMLZ-IPFV-go.CAUS bicycle  
 b. *ny-ende*      *na=[a-na-e-kwendesha*      *baskeli]*  
 1SG.SM-go.PRF with=3SG/G1.SM-IPFV-G1.NMLZ-go.CAUS bicycle  
 c. *ny-ende*      *na=[mw-a-wa*      *ka-na-kwendesha*      *baskeli]*  
 1SG.SM-go.PRF with=G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-go.CAUS bicycle  
 d. *ny-ende*      *na=[a-φ-e-wa*      *ka-na-kwendesha*      *baskeli]*  
 1SG.SM-GO.PRF with=3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-IPFV-go.CAUS bicycle  
 「私は自転車を運転する人と行った」

- (33) a. *na-chaka*      *u-cheze*      *ja [mw-a-cheza*      *vino sasa]*  
 1SG.SM-IPFV-want 2SG.SM-play.SUBJ like G1.SM.NMLZ-PRF-play this.G8 now  
 b. *na-chaka*      *u-cheze*      *ja [mw-a-wa*      *ka-cheze*      *vino sasa]*  
 1SG.SM-IPFV-want 2SG.SM-play.SUBJ like G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-play.PRF this.G8 now  
 「私はあなたに、たった今踊った人のように踊ってほしい」

- (34) a. *na-chaka*      *kisu ja [N-φ-cho-ki-tumia*      *juzi]*  
 1SG.SM-IPFV-want knife like 1SG.SM-PRF-G7.NMLZ-G7.OM-use the other day  
 b. *na-chaka*      *kisu ja [N-φ-cho-wa*      *N-ki-tumii*      *juzi]*  
 1SG.SM-IPFV-want knife like 1SG.SM-PRF-G7.NMLZ-COP 1SG.SM-G7.OM-use.PRF the other day  
 「先日私が使ったようなナイフが欲しい」

- (35) a. *N-ku-veleke* [a-na-ko-kaa<sup>48</sup> Juma]  
 1SG.SM-2SG.OM-send.SUBJ 3SG/G1.SM-IPFV- G15.NMLZ-live Juma.PN
- b. *N-ku-veleke* [a-ko-wa ka-na-kaa Juma]  
 1SG.SM-2SG.OM-send.SUBJ 3SG/G1.SM- G15 .NMLZ 3SG/G1.SM-IPFV-live Juma.PN  
 「あなたをジュマが住んでいるところに連れて行こうか」
- (36) a. *ha-ku-na* [m-na-kwimba nyimbo]  
 NEG-G15.SM-POSS G1.SM.NMLZ-IPFV-sing song
- b. *ha-ku-na* [mw-a-wa ka-na-kwimba nyimbo]  
 NEG-G15.SM-POSS G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-sing song  
 「歌っている人はいない」
- c. *ha-ku-na* [wa-na-o-kwimba nyimbo]  
 NEG-G15.SM-POSS G2.SM-IPFV-G2.NMLZ-sing song
- d. *ha-ku-na* [wa-ø-o-wa wa-na-kwimba nyimbo]  
 NEG-G15.SM-POSS G2.SM-PRF-G2.NMLZ-COP 3PL/G2.SM-IPFV-sing song  
 「歌っている人々はいない」
- (37) a. [mw-a-m-piga Juma] Pandu  
 G1.SM.NMLZ-PRF-hit Juma.PN Pandu.PN
- b. Pandu njo=[mw-a-m-piga Juma]  
 Pandu.PN GVN=G1.SM.NMLZ-PRF-hit Juma.PN  
 「ジュマを殴ったのはパンドウだ」
- (38) a. [nyi-ø-yo-okota] embe  
 1SG.SM-ø-G9.NMLZ-pick up mango
- b. embe njo=[nyi-ø-yo-okota]  
 mango GVN=1SG.SM-ø-G9.NMLZ-pick up  
 「私が拾ったのはマンゴーだ」

(32) - (34) は斜格目的語の例である。(32) では準体言が随伴の *na* に後続している。(33) (34) では、*ja* 「ように」に後続している。(36) は所有表現に後続する例で、不在を表している。(37) (38) は準体言が分裂文中に現れる例である。それぞれ、「誰がジュマを殴ったか」、「あなたは何を拾ったか」という WH 疑問文の答えとなる。WH 疑問文の答えとなる場合、準体言中では既知の情報が表されているが、この準体言は、(37a) (38a) のように、節頭に現れることもあれば、(37b) (38b) のように、提題標識 *njo* のあとに現れることもある。

しかし、準体言単独で現れることのできない場合もある。名詞が *nyi/N* や属辞には後続で

<sup>48</sup> *kaa* という動詞は「暮らす」という意味と「座る」という意味を持つ。なお、「今暮らしている」という意味では *na* 「未完結」でマークされ、「今座っている」という意味では完了形になる。

きる一方で、準体言はこれらの前置詞に直接後続することはできず、主名詞を介在させる必要がある。(39) は 15 クラスの属辞 *kwa* に準体言が後続する例である。

- (39) a. *\*ny-ende kwa [tu-ø-ye-m-kuta jana]*  
 1SG.SM-go.PRF of.G15 1PL.SM-PRF-NMLZ.G1-3SG/G1.OM-see yesterday  
 b. *ny-ende kwa mt'u [tu-ø-ye-m-kuta jana]*  
 1SG.SM-go.PRF of.G15 person 1PL.SM-PRF-NMLZ.G1-3SG/G1.OM-see yesterday  
 「私は、我々が昨日会ったあの人のところに行った」

また、他の名詞とは異なり、準体言は修飾要素（形容詞、指示詞、所有詞、属辞）で修飾することはできない。

#### 4 主名詞と準体言の語順

準体言は、主名詞を修飾する際、他の修飾要素と同様に<sup>49</sup>、主名詞に後続する（(40) (41) 参照）。また、他の修飾要素と共に起する場合、名詞から最も遠い位置に現れる（(42) (43) 参照）。

- (40) a. *mt'u [mw-a-kuja jana]*  
 person G1.SM.NMLZ-PRF-come yesterday  
 b. *\*[mw-a-kuja jana] mt'u*  
 G1.SM.NMLZ-PRF-come yesterday person  
 c. *mt'u [mw-a-wa ka-ja jana]*  
 person G1.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-come.PRF yesterday  
 d. *\*[mw-a-wa ka-ja jana] mt'u*  
 G1.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-come.PRF yesterday person  
 「昨日来た人」
- (41) a. *embe [a-ø-zo-leta Makoto]*  
 mango 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-bring Makoto.PN  
 b. *\*[a-ø-zo-leta Makoto] embe*  
 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-bring Makoto.PN mango  
 c. *embe [a-ø-zo-wa ka-lete Makoto]*  
 mango 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-bring.PRF Makoto.PN  
 d. *\*[a-ø-zo-wa ka-lete Makoto] embe*  
 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-bring.PRF Makoto.PN mango  
 「マコトがもってきたマンゴー」

<sup>49</sup> ただし、指示詞は主名詞に先行することもある。他の修飾要素もある場合、指示詞は先行する方が自然なようである。

- (42) a. *mgeni yangu mkubwa [m-na-lawa mjini]*  
 guest my.G1 big.G1 G1.SM.NMLZ-IPFV-come from town.LOC  
 b. *mgeni yangu mkubwa [mw-a-wa ka-na-lawa mjini]*  
 guest my.G1 big.G1 G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-come from town.LOC  
 「街から来た大柄な私の客」

- (43) a. *kisu changu kikali [N-ϕ-cho-katia kamba]*  
 knife my.G7 sharp.G7 1SG.SM-PRF-G7.NMLZ cut.APPL rope  
 b. *kisu changu kikali [N-ϕ-cho-wa N-katii kamba]*  
 knife my.G7 sharp.G7 1SG.SM-PRF-COP 1SG.SM-cut.APPL.PRF rope  
 「私がロープを切るのに用いた鋭い私のナイフ」

## 5 準体言内の項の位置について

標準スワヒリ語では、「関係節」内の項は「関係節」接頭辞でマークされた要素の前に現れることはできず、後続しなければならないことが知られる (Ashton 1947: 113, Mohammed 2001: 185-186)。カエ方言でも、準体言で修飾する主名詞がある場合、準体言内の項は、準体言接辞でマークされた要素に先行することはできない。

- (44) a. *tu-na-kulya embe [a-ϕ-zo-leta Pandu]*  
 1SG.SM-IPFV-eat mango 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-bring Pandu.PN  
 b. *\*tu-na-kulya embe [Pandu a-ϕ-zo-leta]*  
 1SG.SM-IPFV-eat mango Pandu.PN 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-bring  
 c. *tu-na-kulya embe [a-ϕ-zo-wa ka-lete Pandu]*  
 1SG.SM-IPFV-eat mango 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-bring.PRF Pandu.PN  
 d. *\*tu-na-kulya embe [Pandu a-ϕ-zo-wa ka-lete]*  
 1SG.SM-IPFV-eat mango Pandu.PN 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-bring.PRF  
 「私たちはパンドウがもってきたマンゴーを食べている」

しかし、準体言が修飾する主名詞がない場合、準体言内の項は準体言接辞でマークされた要素に先行することが可能となる。

- (45) a. *tu-na-kulya* [a- $\phi$ -zo-leta *Pandu*]  
 1SG.SM-IPFV-eat 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-bring *Pandu*.PN
- b. *tu-na-kulya* [*Pandu* a- $\phi$ -zo-leta]  
 1SG.SM-IPFV-eat *Pandu*.PN 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-bring
- c. *tu-na-kulya* [a- $\phi$ -zo-wa *ka-lete Pandu*]  
 1SG.SM-IPFV-eat 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-bring.PRF *Pandu*.PN
- d. *tu-na-kulya* [*Pandu* a- $\phi$ -zo-wa *ka-lete*]  
 1SG.SM-IPFV-eat *Pandu*.PN 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-bring.PRF  
 「私たちはパンドウがもってきたのを食べている」

(44) (45) は準体言化接辞でマークされた要素に先行するのが主語となる例だが、目的語や場所名詞の場合も同様である。以下の (46) (47) は目的語の、(48) (49) は場所名詞の例である。なお、目的語や場所名詞が準体言化接辞でマークされた要素に先行する場合、主名詞がなくとも、準体言は定形節の述語に後続することはできない。

- (46) a. *ṁt'u* [*m-na-kwimba nyimbo*] *nyi-m-kut'u*  
 person G1.SM.NMLZ-IPFV-sing song 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
- b. \**ṁt'u* [*nyimbo m-na-kwimba*] *nyi-m-kut'u*  
 person song G1.SM.NMLZ-IPFV-sing 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
- c. *ṁt'u* [*mw-a-wa ka-na-kwimba nyimbo*] *nyi-m-kut'u*  
 person G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-sing song 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
- d. \**ṁt'u* [*nyimbo mw-a-wa ka-na-kwimba nyimbo*] *nyi-m-kut'u*  
 person song G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-sing song 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF  
 「歌をうたっている人に私は会った」
- (47) a. [*m-na-kwimba nyimbo*] *nyi-m-kut'u*  
 G1.SM.NMLZ-IPFV-sing song 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
- b. [*nyimbo m-na-kwimba*] *nyi-m-kut'u*  
 song G1.SM.NMLZ-IPFV-sing 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
- c. [*mw-a-wa ka-na-kwimba nyimbo*] *nyi-m-kut'u*  
 G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-sing song 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
- d. [*nyimbo mw-a-wa ka-na-kwimba*] *nyi-m-kut'u*  
 song G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-sing 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF  
 「歌をうたっている人に私は会った」



- (48) a. *mt'u [a-φ-e-kwenda mjini] nyi-m-kut'u*  
 person 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-go town.LOC 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF  
 b. \**mt'u [mjini a-φ-e-kwenda] nyi-m-kut'u*  
 person town.LOC 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-go 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF  
 c. *mt'u [a-φ-e-wa k-ende mjini] nyi-m-kut'u*  
 person 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-go.PRF town.LOC 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF  
 d. \**mt'u [mjini a-φ-e-wa k-ende] nyi-m-kut'u*  
 person town.LOC 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-go.PRF 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF  
 「街に行った人に私は会った」

- (49) a. *[a-φ-e-kwenda mjini] nyi-m-kut'u*  
 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-go town.LOC 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF  
 b. *[mjini a-φ-e-kwenda] nyi-m-kut'u*  
 town.LOC 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-go 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF  
 c. *[a-φ-e-wa k-ende mjini] nyi-m-kut'u*  
 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-go.PRF town.LOC 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF  
 d. *[mjini a-φ-e-wa k-ende] nyi-m-kut'u*  
 town.LOC 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-go.PRF 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF  
 「街に行った人に私は会った」

## 6 結論

本稿では、スワヒリ語カエ方言で「関係節」とされてきたものを、柴谷の説く準体言として再記述することを試みた。この記述の動機は、カエ方言で散見される「先行詞」のない関係節も網羅した説明を行うことにある。

なお、標準スワヒリ語にもカエ方言のタイプ 2 と同じように、「関係節」接辞で動詞をマークすることで形成される「関係節」形成法が存在するが、自由関係節<sup>50</sup> (free relative clause) として現れうるのがかろうじて指摘されているのみで (Krifka 1995: 1404)、包括的な分析はまだまだなされていない。カエ方言では、「関係節」を準体言と捉えることで、5 節で述べた通り、準体言内の項が準体言標識に先行しうることを記述できたが、スワヒリ語他変種でも「関係節」を準体言として把握し直すことで新たな知見が得られるかもしれない。

<sup>50</sup> 自由関係節の例としては以下のような英語の例文の下線を引いた部分の節が挙げられる。例：  
Whatever she wants she gets. (下線は筆者による)

## 略号一覧

1	first person (1 人称)	LOC	locative (所格)
2	second person (2 人称)	NEG	negative (否定)
3	third person (3 人称)	OM	object marker (目的語標識)
APPL	applicative (適用)	PASS	passive (受動)
CAUS	causative (使役)	PL	plural (複数)
COP	copula (コピュラ)	PN	proper noun (固有名詞)
G	gender (文法的性)	POSS	possessive (所有)
GVN	given (所与)	PRF	perfect (完了)
HAB	habitual (習慣)	PRO	pronoun (代名詞)
INCH	inchoative (起動)	NMLZ	nominalizer (準体言化)
INF	infinitive (不定)	SG	singular (単数)
IPFV	imperfective (未完結)	SM	subject marker (主語標識)
IRR	irrealis (未実現)	SUBJ	subjunctive (接続)

## 参考文献

- Ashton, E. O. (1947). *Swahili grammar (2nd. ed.)*. London: Longman.
- Contini-Morava, E. (1994). *Noun classification in Swahili*. Research reports from the Inst. for Advanced Technology in the Humanities, Univ. of Virginia. Retrieved September 4, 2015, from <http://www2.iath.virginia.edu/swahili/swahili.html>
- Katamba, F. (2003). Bantu nominal morphology. In D. Nurse, & G. Philippson (Eds.), *The Bantu Languages* (pp. 103 - 120). London: Routledge.
- Krifka, M. A. (1995). Swahili. In J. Jacobs, A. von Stechow, W. Sternefeld, & T. Vennemann (Eds.) *Syntax: An international handbook of contemporary research* (pp. 1397 - 1418). Berlin: Walter de Gruyter.
- Mohammed, M. A. (2001). *Modern Swahili grammar*. Nairobi: East African Educational Publishers.
- Nurse, D., & Hinnebusch, T. J. (1993). *Swahili and Sabaki: A linguistic history*. Berkeley: University of California Press.
- Poulos, G. (1986). Instances of semantic bleaching in South-Eastern Bantu. In G. J. Dimmendaal (Ed.), *Current approaches to African linguistics, vol. 3* (pp. 281 - 96). Dordrecht: Foris.
- Racine-Issa, O. (2002). *Description du Kikae: Parler Swahili du sud de Zanzibar: Suivie de cinq contes*. Leuven: Peeters Publishers.
- Shibatani, M. (2009). Elements of complex structures, where recursion isn't: The case of relativization. In T. Givón, & M. Shibatani (Eds), *Syntactic complexity: Diachrony, acquisition, neuro-cognition, evolution* (pp. 163-198). Amsterdam: John Benjamins.
- 柴谷方良 (2014).『準体助詞をめぐる諸問題 -共時論ならびに通時論的観点から-』『日本語学会第 149 回予稿集』 4 - 9.